かわらばん

河原版

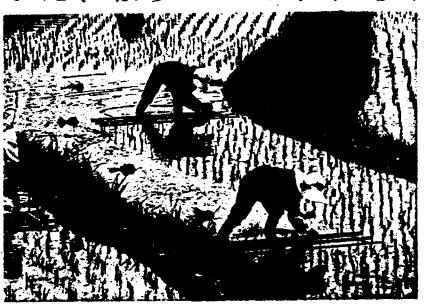
調布の自然で遊ぶ　「野川で遊ぶまちづくりの会」
代表　尾辻　義和　０４２４－８７－４３８５
編集　四方田　清　０４２４－８０－４６４０
第１２号　１９９８年６月発行

お米づくり

大場　典子

「お百姓さんは、八十八回手を掛けてお米を作るのよ。ご飯は一粒も残さず食べなければだめよ。」子供の頃、親や、他の大人からこんな話をされた人も私だけではないと思います。お米作りとは、それ程に、たいへんな作業であるのだという事を、実感させてもらいました。実感するという程、参加していない私ですが。

お米作りの目に見える作業は知っていたつもりですが、その間にある様々な細かい仕事、それに携わり、子供達と一緒に体験ができ、共通の話題もふえ、散歩がてら、種もみが何センチになったかしら、と見にいってみたり、うわね、など、少しで田植えが出来る苗になったもるりますが、楽しま今回三年目にせてもらいます。



ここの田んぼが「谷戸田」という所にまさ東京都の中でも、ほんの数ヶ雨降えうで、残り少ない貴重な環境の所なった翌日には数人の会員のお父さん方が、仕事を休んでの田植事もよくわかりのあるのだという自然の力のすごえ。一ヶ月近く遅い田植えでしたが、まだ出来ただけ良かったそうした。そして、もっと下の田んぼは、その年は田植えは出来なかったようです。

本当にたいへんな年でしたが、昔、水の取り合いで争いがおきたという話も、こんな体験をしてみると仕方の無い事だったのかもしれません。

三年目のお米作り、少しは役に立てるようになったでしょうか。自然と共に過ごす楽しさを知り、たいへんさを学び、良い体験を子達と一緒にさせてもらっています。是非多くの子供達に、このお米とのふれあい体験をさせてあげられる機会があればと思いのます。

用水路の生き物たち　’98

4月26日、朝から少し心配な雲行きでしたが、佐須の水路の清掃兼生き物調査がおこなわれました。私にとっては久しぶりの参加でした。

当日は気温が低いためか、チョウやトンボが飛び回る姿は見られませんでしたが、水量豊富な（春から雨が多いせい？）水路の中を覗いてみると…

まず目につくのはオタマジャクシ。春一番に産卵をはじめるアカガエルのオタマジャクシです。アカガエルはあまりに早く産卵を開始するため、春に雪が多い年には卵が凍りついてしまうこともあるほどです。

アメリカザリガニはあいかわらずたくさん採れました。やはり、大きくて真っ赤なものが人気な様子。私は最近、アメリカザリガニをエビチリ（ザリチリ？）にして食べる機会に恵まれましたが、殻を剥いている時には「泥臭いな」と思ったものの、身は全くのエビの味で美味でした。ただ、体やはさみが大きい割にお腹が小さいので、たくさんつかまえたわりには、あまり食べられませんでした。

セキショウモの下に網をかまえて、上流側からジャブジャブとおどかすと、網の中にエビが入ります。ヌカエビです。薄い緑色で体が透き通っているものと、黒っぽい色で体が透き通っていないものと、2種類いるように見えますが、黒っぽいものは繁殖期を迎えたメスで、よく見るとお腹に卵を抱えています。観察が終わって水の中に放してあげると慌てて水草にしがみつきます。飼育するときも水草を入れておいてあげるといいでしょう。

湧き水の水路の象徴、ホトケドジョウが今年はたくさんとれました（普通のドジョウも大きなものが2匹採れました）。ホトケドジョウは4㎝くらいの大きいもので、このくらいのサイズになるには最低でも2年くらいはかかるものと思っていましたが、横浜市での調査によると、1年間でこのくらいのサイズになるようです。5月頃から6月頃に稚魚が孵化する（9月頃にも少し繁殖する）ようなので、今回採れたホトケドジョウたちはそろそろ1才の誕生日を迎えるのでしょう。昨年は比較的雨が多くて、深刻な水不足にならなかったことが、今年の豊漁の原因かもしれません。1匹生まれたばかりの稚魚がつかまりましたが、今年の4月は暖かかったので、もう繁殖が始まったのでしょう。ホトケドジョウの成長や食性（何を食べているのか？）については、信山社の『都市の中に生きた水辺を（身近な水環境研究会　編）』という本の中に紹介があります。その本によると、ユスリカの幼虫やミズムシをよく食べているようです。

佐須の水路にもミズムシはたくさん住んでいます。庭の植木鉢や石ころをひっくり返すとダンゴムシに混ざって、ワラジムシが見つかります（ダンゴムシのように丸くならず、ちょっと平たい体をしたアレです）。ミズムシはワラジ

ムシそっくりで、いわば水中ワラジムシです。湧き水の小川から公園の池までいろいろなところにすんでいます。ミズムシを飼っている水槽に枯葉を入れておくと葉脈だけを残してきれいに食べてくれます。

今回の生き物調査では、ミズムシに似たヨコエビも 2 匹つかまりました。こちらはワラジムシよりはダンゴムシに似ています。ダンゴムシを縦に平べったくしたような体つきで、エビに似ていなくもありません。西日本の小川や湖ではウジャウジャ採れますが、東日本には比較的少なく、佐須の用水路で見つけたのは初めてです。

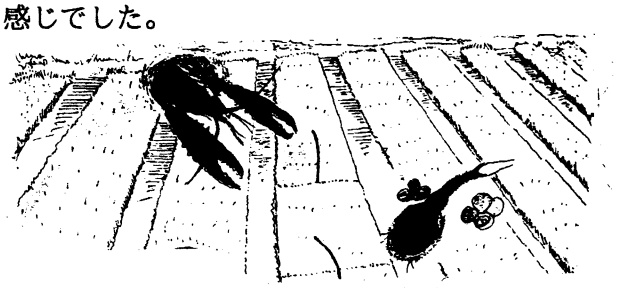
ホトケドジョウのもう 1 つの主要な餌であるユスリカの幼虫は、アカムシと呼ばれています。釣の餌や金魚を飼うときの餌としてペットショップなどで売っています。これも用水路で見つかりました。親は蚊に似ていますが、血は吸いません。

水路にはほかにどのような水生昆虫がいるのでしょう？全体的に小さいものが多かったので、子供たちにとってはザリガニやオタマジャクシの方が魅力的なようでしたが、カワゲラの 1 種の幼虫、コカゲロウの幼虫、モンカゲロウの幼虫、オニヤンマの幼虫、シオカラトンボの幼虫が採れました。

モンカゲロウの幼虫はちょっと変わった格好の虫です。細長い腹部の上にフサフサとした毛がたくさん生えています。これは鰓（エラ）です。足は結構ゴツイです。特に前足はまるでモグラのようです。それもそのはず、モンカゲロウは水底の泥の中に穴を掘って生活しているのです。鰓が背中側についているのも、大事な意味があります。モンカゲロウは泥の穴の中で鰓をユサユサと動かします。すると水の流れがおきて、モンカゲロウの巣の中に水と一緒に細かいゴミが入ってきます。モンカゲロウはこの「ゴミ」を食べて生活しているのです。もしも、お腹の下に鰓がついていたら、水の流れを起こすのも大変だし、息苦しいかもしれませんね。モンカゲロウは 4〜5 月が羽化の季節です。つかまったけっこう大きな幼虫は羽化間近だったのでしょう。

今年は柏野小のすぐ下の泥深いところでの採集はしなかったので、大きなオニヤンマのヤゴは採れませんでした。昨年生まれの小さいものは採れましたが、「オニヤンマのヤゴよりもシオカラトンボのヤゴの方が大きい！」というややこしいことになりました。

久しぶりの用水路でしたが、あまり変化も無く、まだまだ楽しめるなといった感じでした。



上村　佳孝
東京都立大学
理学部生物学科

「用水路の清掃と生き物調査に参加して」

田村 正人

今年で田んぼの米づくりも３年目。忙しい事務所と現場の仕事の間をみて土いじり草いじりするのが気持ちよく思えてきた。それにしても、やっぱり天気がいいのが一番だ。田んぼを始めて野川の水の流れがやけに気にかかるようになり、今年は今のところちょっと
ホッとしている。行政が勧めている雨水浸透式～で、土地の保水力が増したのか！？（そんなに急にはムリですヨ…）

４月２６日、日曜日。今日は田んぼの用水路の清掃と生き物調査。きのうはあんなに晴れて暑いくらいだったのに、朝からポツリポツリと肌寒い。それを言い訳にするのも何だけど、ちょっと遅刻。子供たちを連れて用水路へ（本日、我が奥さんは別の所へ“花”植えの作業）。

巾１間ほどの水路を上流からゆっくりと歩くと、あります、あります、ビニール袋と空き缶。空き缶はゴミ拾いの楽しみ？で、その中にバルタン星人みたいなザリガニがいる。投げ込まれてから時が経っているほどザリガニがいる確率は高く、中をのぞき込んだ子供たちに歓声を上げさせる。

ちょっと水から出て用水路わきを歩いていると、下流のほうから四方田さんが呼んでいる。水の中に１メートルもあるような青大将が弱って丸くなっているのだ。溺れてしまったのかと思ったが、後で説明を聞くと、木に登るのも泳ぐのもうまいそうだ。何か悪い物を飲み込んだか、骨折でもしたらしい。ともあれ、その青大将にはしばしみんなのおもちゃになってもらい、神社の木にお移りいただいた。

用水路のゴミの量は例年より少な目だけど、それでも、木っ端、雑誌、ペットボトル、自転車、タイや、ゴムキャタピラ、建築資材ゴミなど、いつもの多彩な顔ぶれが揃っていた。

リヤカー約３台分のゴミを片づけて、上流の生き物探しをしていた連中と合流。

・ザリガニ	♂、♀はオナカに足のような物がある。
・どじょう	１１センチ位のが２匹。
・仏どじょう	３センチ位のがいっぱい。
・ヤゴ	しおからトンボは１．５センチ位、 オニヤンマは太め。
・淡水のエビ	１０匹くらい捕れていたかな。
・おたまじゃくし	まだ小さかったけどいっぱい。

トンボ博士の上村さんの説明を聞いて、一同フムフムと納得しつつ解散の運びとなった半日だった。

帰ってからの、やはりビールは、家でゴロゴロしているときとは違う、格段にうまかぁーのビールだった。

さあ、今年の豊作に、一人ニンマリ乾杯という訳。

「たくさん見た生き物」

柏野小５年　大場　孝信

ほとけどじょう、どじょう、おたまじゃくし（にほんあかがえる）、ザリガニ、かげろう、やご、あおだいしょう、を見た。どじょうは、どろの中に住んでいるから、どろの中にあみをつっこんでつかまえた。ほとけどじょうもだいたいおなじようにつかまえた。けど、ほとけどじょうは水くさのところにいるから、そこにあみをつっこんだ。ほとけどじょうは、わき水のようにきれいな水でないと生きられないと上村先生が言っていた。この用水路はすごくきれいだなーと思った。ほとけどじょうは５センチメートルぐらいでふつうのどじょうより小さかった。顔はにていたと思う。なんでほとけどじょうと言う名前になったんだろう？

かげろうはせなかにえらのようなものがひらひらしていて８の字を書いているように見えた。長さは２センチメートルぐらいだった。

この日はぼくの同級生のそう田君と関口君も参加していた。２人も水の中の生き物が好きだから、楽しくつかまえた。

たまごをもったえびをつかまえてみると春が産らんの時期だとわかった。

友達といろいろな生き物をつかまえたこともたのしかったけど、上村先生がぼくたちのつかまえた生き物を、くわしくおしえてくれてとても勉強になった。

「調布市水辺環境保全基本計画」ってなに？

尾辻　義和

堅い話ですが、最後までおつきあい下さい。

調布市は、平成８年度「調布市水辺環境保全基本構想」を建て、平成９年度にそれに基づいて「調布市水辺環境保全基本計画」の策定を行いました。策定委員会は５回の委員会を経て、これをまとめ、市長に答申しています。

これと並行して、市民による活動もいくつか行われています。平成８年８月に「水辺の楽校シンポジウム調布 1996」が学校と水辺の一体的な活用をテーマに開催されました。平成９年３月には「調布の水辺環境シンポジウム」が児童館ホールで開催され、調布の水辺環境をテーマにパネルディスカッション、市民活動の発表も行われました。また、平成９年度市民講座として水辺環境をテーマに市民が先進事例の見学や、勉強を重ね、具体的な市民提案などが行われました。平成９年１０月１０日には、２回目の「調布の水辺環境シンポジウム」が『調布にいきづく田んぼトーク』と題して行われ、筆者が実行委員長を務めさせていただきました。パネルディスカッションでは会員の大木智恵子さんに田んぼの取り組みなどをお話ししていただきました。このシンポジウムでは、私達が毎年清掃と生物観察会を行っている佐須の用水路と周辺の田んぼを焦点に意見交換が行われ、この周辺の貴重な環境が再認識されました。

予定では、この計画が市長の承認？を得て、建設省、東京都環境保全局などのサポートで柏野小学校にモデル事業を行うはずでしたが、小学校やＰＴＡの反対？で実現は先送りされています。行政の担当者はあきらめないと言っておりますが、当事者には、やはり急な話ではなかったかと思います。いつもの、行政の独断専行型ではないかという気がします。また、もともとグランドが狭いということがあるところへ、道路計画による学校用地縮小が、おそらくＰＴＡなどに何の説明もなく行われるということでは、理解がすんなり得られるというわけにはいかないのではないでしょうか。地域における小学校の問題を地域と共にトータルに考えることもなく、建設部は計画だからといって道路のためにグランドを削り、環境部は水辺環境を保全したいから水路を作りたいというだけでは、当事者は踏んだり蹴ったりという気がします。

市民参加がよく言われており、調布市のマスタープランづくりも市民参加で行われるようなところまできているのに、このモデル事業が地域の市民参加で行われなかったのが残念です。一度、計画を小学校の職員や、ＰＴＡに預けてみてはどうかと思います。調布市（環境部）の考えていることの理解は得られると思います。職員や、ＰＴＡがこの事業を子供達や地域にとって重要な物であることを認識するのに時間はかからないと思います。この問題を機会に、柏野小学校が抱える問題をトータルで考える場を作って、自分たちでよりよい学校環境を築き上げていくことを実践してみてはどうでしょうか。

野川流域調査報告／大西友幸OONiSHiTOMOYUKi（学生）

野川流域地圖を作りはじめてはや１年半が經ちました。この間に、13枚の野川流域地圖を描き上げ、『野川流域地図』という本も作ってしまいました。ここで、あらためて、13枚の野川流域地圖をざっと紹介し、「河原版」での紹介豫定を立ててみます。

13枚の野川流域地圖というのは、

①水源（野川源流からあやめ橋まで：日立中央研究所や国分寺のあるあたり）
②国分寺（あやめ橋から西之橋のひとつ下の橋まで：殿ケ谷戸庭園のあるあたり）
③小金井（坂下橋から丸山橋まで：滄浪泉園や前原小学校のあるあたり）
④前原（新前橋から箭眞舳橋まで：武蔵野公園や調節池のあるあたり）
⑤野川公園（二枚橋から相曾浦橋まで：野川公園やＩＣＵのあるあたり）
⑥大沢（樫橋から清水橋まで：国立天文台や調布飛行場のあるあたり）
⑦深大寺（八幡橋から橋場橋まで：神代植物公園のあるあたり）／1994渇水期版もあり
⑧佐須（橋場橋からおかね橋まで：水生植物園のあるあたり）／1994渇水期版もあり
⑨大町（おかね橋から小金橋まで：大町小学校や野川小学校のあるあたり）
⑩入間（小金橋から谷戸橋まで：西野川せせらぎや入間公園のあるあたり）
⑪若葉（入間橋から明神橋まで：瀧坂小学校や実篤公園のあるあたり）／入間川流域
⑫柴崎（近幸橋から中仙川橋まで：柴崎緑道や上ノ原公園のあるあたり）／入間川流域
⑬野ケ谷（入間川源流地跡から中仙川橋まで：諏訪神社のあるあたり）／入間川流域
（⑤⑦⑧は改作で、一度作ったものをまた描き直しています）

ですが、これらの地圖の詳しいことは『野川流域地図』をご覧ください。また「河原版」の紙面をお借りしても紹介しますが、その内容は、

濟	：「深大寺」（改作でない）	：№09／野川流域地圖作成の進め方／199406
濟	：「柴崎」	：№10／野川流域地圖の案内と掲載順序／199411
濟	：「若葉」	：№11／保存樹木番付／199505
今號	：「佐須　改作」	：№12／野川流域地圖の案内
豫定	：「大町」	：№13／用水路・緑道番付
豫定	：「入間」	：№14／緑の環境保全地區・緑地番付
豫定	：「野ケ谷」	：№15／小規模公園番付
豫定	：「大沢」	：№16／中規模公園番付
豫定	：「改作　野川公園」	：№17／寺社番付
豫定	：「前原」	：№18／湧水番付
豫定	：「小金井」	：№19／野川流域地圖作成の手順
豫定	：「国分寺」	：№20／いろいろな絵地圖紹介
豫定	：「水源」	：№21／絵地圖の意味

を考えています。

『野川流域地図』の内容は大きく三つに分かれています。

1)13枚の野川流域地圖を紹介する内容
2)野川流域地圖の作成過程を紹介・検討し、絵地圖とはどういうものなのかを考える内容
3)野川流域地圖を作るために参考にしたり材料にしたりした資料の紹介する内容

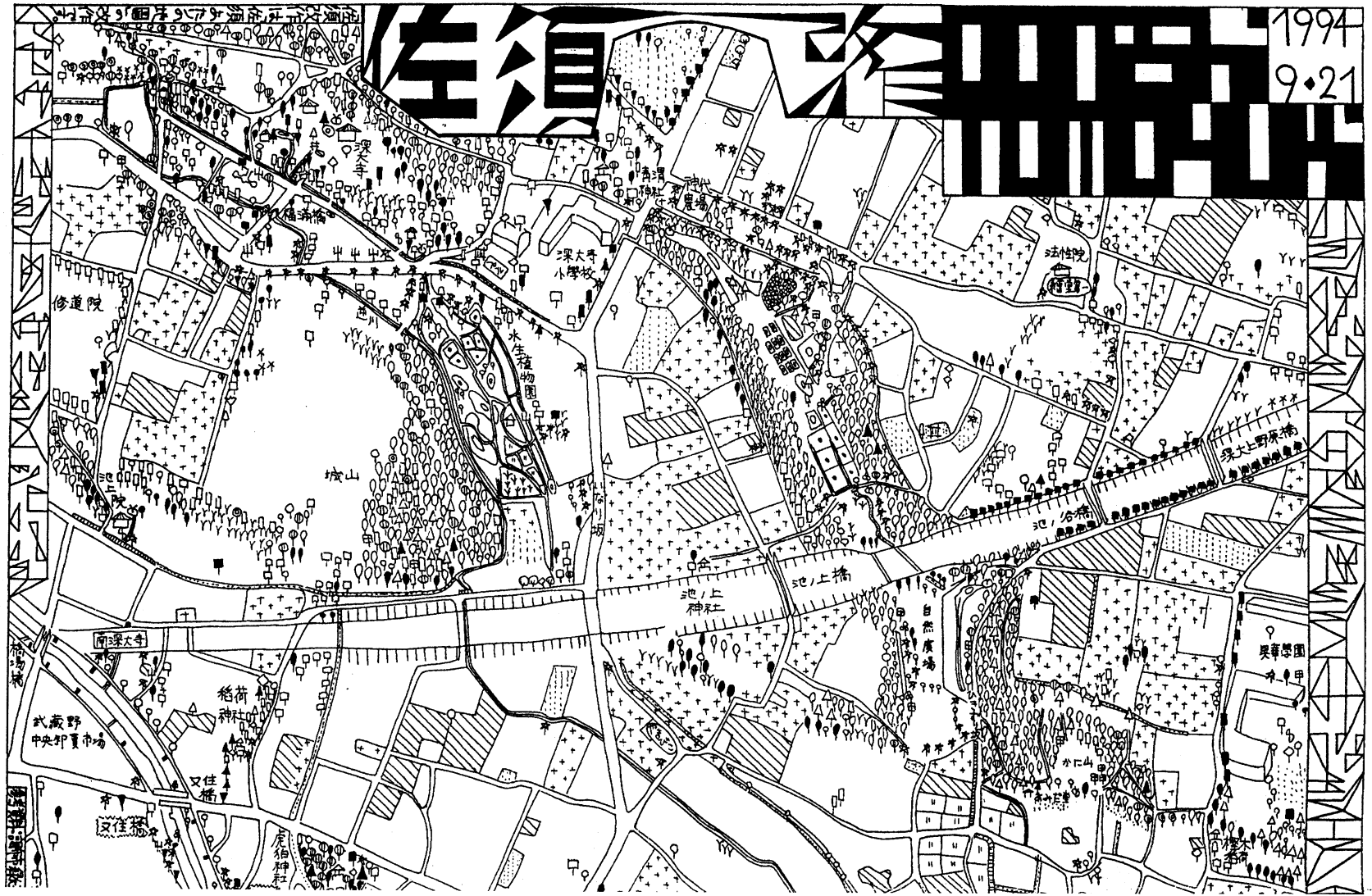
「河原版」では、1)の内容のものを毎號掲載し、2)の内容のものを№19・21で掲載し、3)の内容のものを各種番付や№20で掲載していく豫定です。

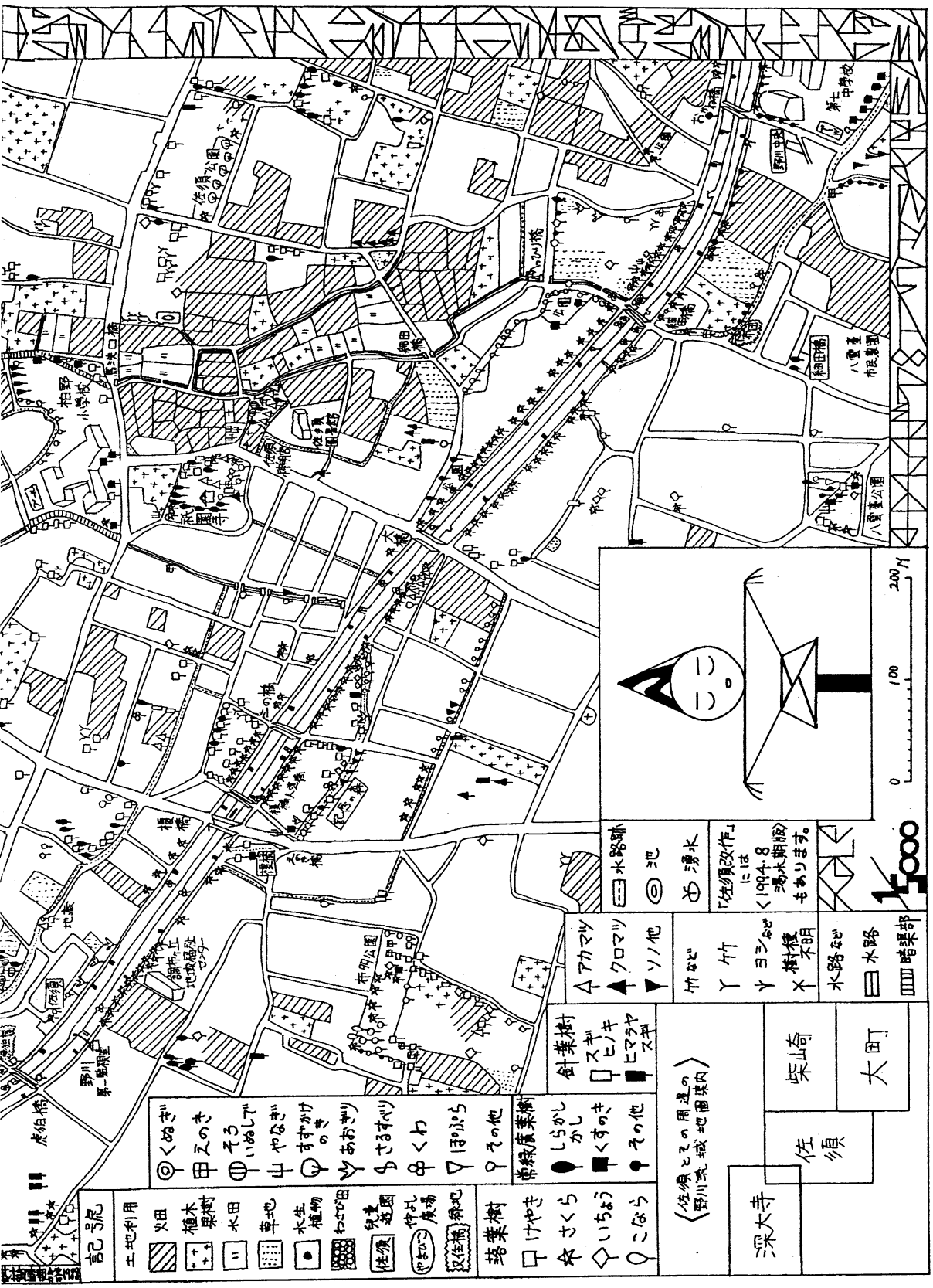
野川流域地圖はできあがったらかなり量の多いものになったので僕も四苦八苦しています。「河原版」ではゆっくり紹介していきたいと思っています。

『野川流域地図』は圖書館に置いてもらうことを考えています。『野川流域地図』をご覧になりたい方は圖書館から借りるようにして下さい。都立圖書館にも置くことを考えているので、お近くの圖書館になくても、都立圖書館から取り寄せてもらって借りることができると思います。

住須旅

1994
9・21


深大寺
深大寺小學校
法性院
修道院
城山
池上院
池上橋
池上神社
自然廣場
かに山
武蔵野中央卸賣市場
稲荷神社
又住橋
反住橋
尾狛神社
南深大寺
橋場橋
水生植物園
芦川
坂
吳華學園
緑大上野原橋
池ノ谷橋


記号
土地利用
水田
植木 果樹
水田
草地
水生 植物
わさび田
佐須 公園
仲よし 庚塚
佐須 緑地
落葉樹
けやき
さくら
いちょう
こなら
常緑広葉樹
くぬぎ
えのき
そろ
いぬしで
やなぎ
すすかけ のき
あおぎり
さるすべり
くわ
ほうのき
その他
針葉樹
スギ
ヒノキ
ヒマラヤ スギ
アカマツ
クロマツ
ソノ他
竹など
竹
ヨシなど
樹種 不明
水路など
水路
暗渠部
水路跡
池
湧水
「佐須改作」には 1994・8 湯水期版 もあります。
1/5000
0
100
200M
〈佐須とその周辺の 野川流域地図案内〉
深大寺
佐須
柴山台
大町
柏野
小学校
佐須公園
佐須口橋
細田橋
八雲園
八雲園公園
中学校
野川中央
野川 第一集落
虎伯橋
橋
地蔵
銅板工 地域活動 センター
西園
二の橋
三の橋
地蔵
佐須 公園
佐須 緑地
佐須 寺
佐須 観音堂
佐須 観音堂
佐須 観音堂

ご無沙汰しました！

昨年（９７年）のたんぼ耕作報告

大木健次

御挨拶

2年振りのご無沙汰でございます。たんぼを始めて、今年で 6年目になりました。
この間、たんぼのメンバーには、結婚した人、少年野球のコーチ役にのめり込んでいる人、犬を飼い始めた人、等々様々な変化がありました。
平均年齢も上がりました。その分子供たちも大きくなりました。大きくなった子供たちが、親同様にたんぼ好きになっているかというと、必ずしもそうでありません。
またそれでいいと思います。
今の子供たちの内の一人か二人でも、大きくなったときに、自分でもたんぼをやってみようと思ってくれればよいと思います。
ただ、大人の若いメンバーに参加してほしいと思うこの頃ではあります。
昨年１年のたんぼ耕作の様子を、たんぼ新聞から抜粋してご報告します。

１．苗半作・大事な大事な種もみまき（４月２６日）

３日前に水浸させたアキニシキの種もみを苗代に撒くべくたんぼに行ったところ、他にメンバーがいないのを見かねた大家の竹内さんが、苗代の切り直しから種蒔きまでを手伝ってくれました。苗代の土を細かくすべく小型耕耘機を出して何度もうなってくれ、化成肥料を貸してもらい、更に御自身で種を撒いてくれました。
「いい種だし、面積的にも充分」とのことでした。

２．田植前のお楽しみ・たんぼに待望の水入る！くろつけ（６月８日）

前日に畔の内側に溝を掘り、水を引き入れておきました。当日朝、まず、バケツで溝にたまった水を畔にかけます。それから一辺ごとに、泥作りと畔塗りをしました。
最後は鍬でなで付け、今年も立派な畔ができました。昼頃には最初に作った畔の上を子供が歩けるくらいに乾いていました。
久し振りに大勢参加。大人６人、子供大勢がたんぼに集まり、盛況でした。

３．臨戦態勢！会社を休んで代かきする（６月２０日）

前日の雨で、待望の水が田圃を浸している。朝７時。メンバーの尾辻さんに電話し、代かきすることに決定（会社を午前半休）。台風の通過前で、断続的な雨。水は十分。苗代はそのままにして、田圃を縦横充分に耕耘機でこねる。水温は暖かい。

４．きつい仕事だ・苗取り。お祭りだ・田植え（６月２０日・２１日）

２０日の苗取りは参加者が少なく、時間がかかる。かがんでの作業はつらいものがある。
初参加の佐藤さんは、「こんな大変な思いをしたからには、その分、収穫祭で、餅を食べまくる。」と激白。確かに８週間置いた苗の根の張りは強いものがありました。
苗をとった後を代かきし、泥の沈殿を待って田植えを開始。
神田生まれの江戸っ子・大場さんは、「日本文化としての田植えは「型」が大切」と、認識も充分に、生まれて始めての田植え。
午後からは、５年生の女の子が５人“早乙女”のごとくさっそうと登場。田圃が華やぐ。
田圃の端で、最初から最後まで、泥の中を泳いでいる男の子もいる。
終わって乾杯したビールの旨かったこと。今年は最高。
２１日は更に盛況。依田さんの近所の子供たちが繰出し、アッという間に、残り３分の２が終了。今年の盛況ぶりを見るにつけ、田植えと餅つきは特別だ、との感慨新た。

５．苗がかわいい・一番草（７月１３日）

株のまわりの泥を手でかき回す、「一番草」の作業をしました。根に酸素を供給し、横にはった根を切り、下根を伸ばすように仕向けるための作業です。田植えから３週間、株は、分けつと伸長を開始していました。オタマジャクシが沢山いました。

6．必要悪だ急げ・消毒（7月27日）

尾辻さんが、「害虫の幼虫を１時間で、１００匹とった。」と教えてくれました。
害虫の季節がやってきました。「虫が葉を食べる音が聞こえる」（去年の竹内さん談）
状態は、今年は是非避けようと思っています。
そこで、去年の余りの殺虫剤（バダン水溶液）を噴霧器にいれて、田んぼへ入りました。ガの類は、ほとんど見掛けませんでしたが、用心に越したことはありません。
また、竹内さんのアドバイスで、田んぼの水を少なめにしました。今後は、穂水、花水など必要に応じて、取水することとします。

7．真夏の夜の夢・やきとりの夏・終わる！（8月22日・23日）

熱帯夜・耳をつんざく調布音頭・煙・歳と共に衰える足腰……真夏の夜の夢・柏野夏祭りの閉会と共に、やきとりの夏が終わりました。費用捻出と地域親睦のために参加して３年目。今年は、２日目に、凄まじい夕立付きの、フィーバーでした。
人手不足を心配して金曜日に駆け付けてくれた、メンバーの中野さん、大場明子ちゃん、焼き手の主力として活躍してくれた尾辻さんのお兄ちゃん　　には大感謝。
日曜日の後片付けには、尾辻さん、大場さんに協力いただきました。

8．豊年だ、満作だ、稲刈りだ！（10月4日・5日）

今年の稲は順調です。実りは最高です。８月中旬には、出穂が終わり、現在は黄金色にたれています。水路側の穂はすずめにたべられています
９月１３日に急いで水糸を巡らせ、防鳥用のピカピカ光るテープをたらしました。
稲刈りは１日目が雨でした。はざを組む竹が、稲の重みでポキポキ折れました。久し振りのズッシリと重い穂でした。
また、葉は青々としており、いい藁がとれそうです。５年生の女の子たち、大場さんのおじいさん、参加ありがとうございました。

9．田んぼ完全復活！豊作の実感・脱穀終わる！（10月25日・26日）

秋晴れが続き、藁も実も、十分乾いてます
はざから降ろす束は、穂だけがズッシリ重く、収穫の実感十分です。
籾にして、９袋とれました（うち、もち米３袋）。玄米換算で、６袋（120kg)いくんじゃないでしょうか。
去年の不作を挽回し、田んぼは完全復活したようです。
竹内さんから毎年借りている、年代物の脱穀機は今年も十分働いてくれました。
尾辻さんや、田村さん、堀さんなど、当会気鋭の「機械に強い」方々がしっかり使いこなしておりますが、それでも、微妙な調整により、機械のご機嫌を伺いながらうまくおだてて働いてもらっているような風情がなんともいえません。愛すべき機械といえます。収納の際、堀さんに錆止めをさしてもらいましたが、外側さえもてば、まだまだ使える優れ物なのではないでしょうか。
佐須地区の農地が、泥田→暗渠排水→用水路の舗装化→水量の減下→畑作転用の変遷をたどった歴史と共にあった、歴史の生き証人的な存在なのでしょう。

10．大盛況！収穫祭おこなわる（11月24日）

前日に精米し、収穫は、もち46kg、うるち84kgの計130kg と豊作。
そのうち、餅つきに25kgまわして、もち、とん汁、焼き肉、焼き芋の豪華メニューの収穫祭となりました。当日の天気は晴れ、田植えの日を思い出します。順調な１年の締め括りにふさわしい天気でした。
参加者は、会員の家族に友人・知人を含め、50～60人ほども。
合いの手の大場さん、堀さん、今年もありがとうございました。田村さんのダンナが合いの手がうまいのは発見でした。
つき手のお父さんたちのコンデイションが心配されましたが、途中から入ったビールの勢いのせいか、船研のお兄さんたちの加勢のお陰か、無事済みました。
大場さんのおじいさんをはじめ、差し入れをいただいた方々には、ありがとうございました。会員の皆様、後片付けまでご苦労様でした。ゲストの方々、来年は田圃仕事でお会いしましょう。

田んぼ・カニ山の生き物レポート

＜１９９５年夏＞

上村　佳孝（大学１年）

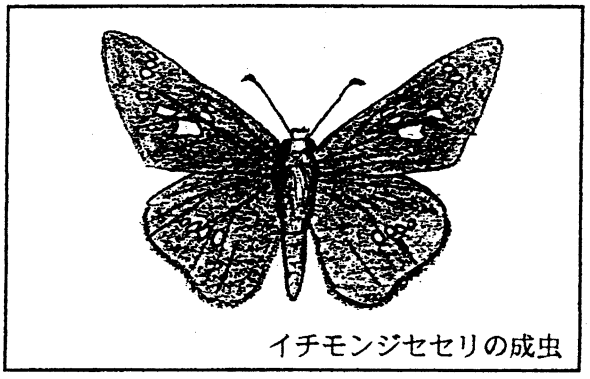
8月20日。あいかわらずの暑さの中、今日は田んぼの害虫退治の日。ついでに、田んぼに住むいろんな生き物（イイ奴もワルイ奴も）を観察しました。僕は害虫はあまり取りませんでしたが…。

まず、みんなの注目を浴びたのは、たくさんのアゲハチョウ。地面にたまった水をみんなそろって飲んでいました。実はチョウの中で水を飲むのはオスだけです。なんで、オスだけが水を飲むのか？メスを探して飛び回り、ほてった体を冷やすためという説もあるようですが、詳しいことはよく分かっていないようです。モンシロチョウもつかまえました。それから、庭先でもお馴染みの小さなヤマトシジミ。稲の葉の布団でヌクヌクしていた憎い害虫は、イチモンジセセリの幼虫でした。イチモンジセセリは秋にいろいろな花に来る小さな茶色のチョウですが、色が地味で素早く飛ぶため、ガやハチとよく間違えられます。

害虫といえば、ハネナガイナゴもいました。イナゴはバッタの親戚です。田んぼにはヒシバッタ、オンブバッタ、ショウリョウバッタ（特大！）がいました。バッタの仲間はたいていの場合、メスの方が大きな体をしています。オンブバッタの場合、おんぶしているのがメス、されているのがオスです。

バッタは草を食べますが、コオロギは野菜屑や小さな昆虫などを食べる雑食性です。田んぼの畦の周りではエンマコオロギがたくさん見られました。閻魔様のように大きくてデップリとしたお腹が特徴です。オスはお腹の先に2本のしっぽ（？）があり、メスは3本あります。メスの真ん中のシッポは、卵を地面の下に産むための産卵管です。

悪い虫をこらしめるのはエンマコオロギだけではありません。まだハネの短いオオカマキリの子供や、畦に網を張るナガコガネグモ、刺されると痛いコアシナガバチなど、田んぼを見張る頼もしい虫もたくさんいました。アマガエルも田んぼの虫を食べます。それからトンボも。南からの使者のウスバキトンボ、小さなアジアイトトンボ、そして、お馴染みのシオカラトンボ。トンボは全て肉食性です。ギンヤンマは目撃者が続出しましたが、結局、手に入ったのは稲の残された抜け殻だけで、少にし残念でした。ギンヤンマの抜け殻では、オニヤンマのようにゴワゴワして泥がこびりついたりはしてません。ツヤツヤして大変スマートです。



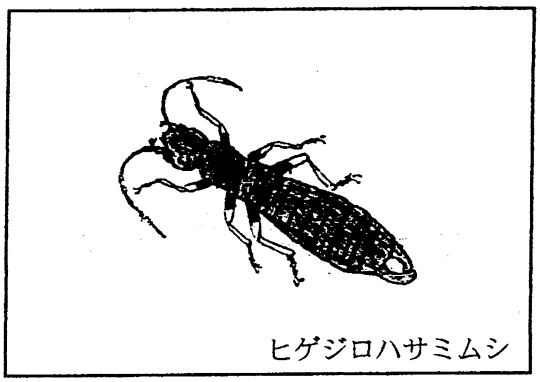
イチモンジセセリの成虫

まだまだたくさんの生き物を観察しましたが、とても紹介きれません。処罰されたイチモンジセセリの幼虫とガラスビンの温室に監禁されて命を落とした虫たちの冥福を祈ります。

9月23日、24日は毎年恒例のカニ山炭焼きキャンプ。しかし、天気はあまりよく

ない。アキアカネが山から帰ってきてはいるが、枝先でじっとしていて、元気がない。こんな日は石を裏返してみたり、朽ち木をくずしてみよう。気味の悪い虫もたくさんいますが、驚くほどきれいな虫や珍しい虫もいます。ムカデには御用心！！

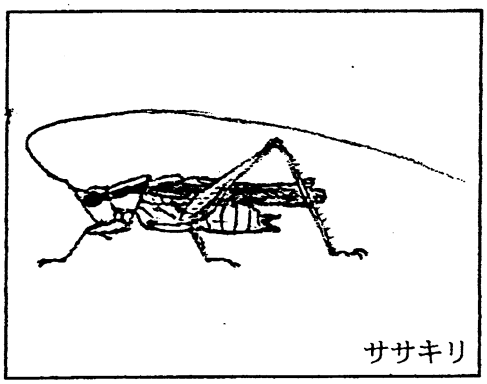
まずは、ヒゲジロハサミムシ。6月ごろには植木鉢の下などで卵を抱いているメスを見かけます。卵のめんどうをよく見る上に、卵がかえるまで2週間ほど、メスは餌を食べません。ハサミにはさまれても全然痛くありませんし、飼って見ると面白い虫です。


ヒゲジロハサミムシ

それかさんのセピカ光っ糞に集まきなエンコオロシ（甲虫林の虫はチョウいところら、腐った枯れ葉の下からたくンチコガネを発掘。紫色にピカて宝石のようですが、こいつはる虫です。朽ち木の下からは大マコオロギと小さなツヅレサセギ、木の皮をめくればクチキムの仲間）がノソノソと。どうも地味なものが多いようです。だってモンシロチョウよりも暗好きのスジグロシロチョウ。斜面から空き地の草むらにおりてみましょう。

ヒメジャノメ（チョウ）が飛んでいる。元気な羽音をたてているのはキンケハラナガツチバチ。ベッコウバチの一種が獲物のクモを引っ張っていく。オオカマキリはもうすっかり大人になっているし、茶色のコカマキリ、デブのハラビロカマキリもいました。

アマガエルは草のあちこちに。大小のヒキガエル（ガマガエルとかイボガエルとか呼ばれる）も捕獲。すばやい茶色のトカゲはカナヘビ。捨てられたバイクに逃げ込んだヤモリも子供の執念に負けました。なんんだかゲテモノのオンパレードになってきました。なんとヘビも巨石の下の寝込みを襲われました。このヘビの名はヒバカリ。「かまれたらその日ばかりの命」という恐ろしい由来にもかかわらず、無毒で、かみつこうとさえしない水辺のおとなしいヘビです。


ササキリ

しかし、秋はやはり鳴く虫のシーズン。コオロギだけではなくたくさんのキリギリスの仲間が発見されました。ジギジギと鳴く小さなササキリ、スイッチョの声で知られるウマオイ、小さなシンバルのようなツユムシetc。キリギリスの仲間は飼うのが簡単ですから、どんな声で鳴くのか？枕元で耳を澄ますのも面白いと思います。

雨が激しくなってきても、子供達は朽ち木のシロアリ帝国の破壊に熱中していました。大きなキバの兵隊アリもこれにはかないません。当初は僕が何か観察のテーマを決めるつもりでしたが、みんながそれぞれの執念と根性を持って、雨ニモ負ケズに生き物に接しているのもなんだか新鮮でした。

頑張れ！都市農業(10)

＜私達はなぜ田んぼを耕すか＞

依田輝男

この拙文も 10 回目になりました。

私達が会を作ってからは、8 年目になります。そして 3 年目に田んぼお借りすることが出来たのですから、田植えも 6 回目を迎えました。始めた頃と比べて自分の中で思いが変わらない部分と、考えがより深まった部分があります。この辺でもう一度初心に帰って、田んぼを作ることの意味について考えてみようと思います。

「野川」という都市の中の貴重な自然環境の中で遊ぶことを出発点として身近な自然の大切さを考えていこう。それも「小さな生き物の 視点」から考えて見ようというのが私達の立場でした。

そして川へ入って水遊びをしたり、魚や水性生物を捕まえて種類を調べたり川辺の草花を見て歩いたりしているうちに、しだいに野川がサイボーグみたいな川であり、そのため生き物の種類も少ないことが解ってきました。それに輪をかけたのが次第に頻繁になってきた野川の渇水です。弱小な生き物はいのちを子孫に伝えることが出来ないのです。私達の目は野川の湧き水や命を育む環境全体、即ち田んぼや畑や雑木林へ向いました。そこには農業高校の農場やカニ山に囲まれた谷戸から流れ出した湧き水の用水路を中心に田んぼ、畑、寺社林や屋敷林の広がる、まさに「里山の風景」がありました。

丁度その頃、つくば研究学園都市に農水省の農業環境技術研究所の植生動態研究所室長の守山弘氏の造られたミニ農村(約 100 ヘクタール)を見学に訪れ深い感銘を受けました。霞ケ浦から水を引き、雑木林やため池、田んぼ、むらはずれにはお稲荷さんまで置き、昔のままの田園風景「里山」の再現です。

3 年後そこには 3 0 数種類のトンボ、ダルマガエル、トカゲやヘビ、カワニナ、色んなバッタ、キツネやタヌキまで姿を見せたといいます。いかに里山が多様性に富みエコロジカルな空間であるかが解ります。この様な谷津田(谷戸田)を取り巻く環境は日本の「原風景」ともいうべきものです。

私達の祖先が世界でも稀ににみる森の多い環境の中で、「落葉樹の森の文化」ともいうべき縄文文化を発展させ、日本の温暖化と共に東進してきた照葉樹の森の中で、焼畑農耕によって雑木林を維持し、縄文時代の末期に大陸から稲作技術をもった人達が大量に渡来し、米作りを広めて行きました。

雑木林は水源涵養林として、また燃料、肥料収集の場として大切に維持されてきました。

このような都会に残された貴重な場所で田んぼ作りをしながら、私達は雨に願いをかけ、お日様に感謝し、風に心悩ませ、雀の群と戦い、自然を身に染みて感じた日々でした。そこで出会った愛しい生き物たち、イナゴ、バッタ、カマキリ、オケラ、ドジョウ、ヤゴ、アマガエル、ガマガエル、カワニナ、シジミ、虫を狙ってくるセキレイやツバメ。しかし何といってもたんぼの主役は季節の変わり目毎に顔を見せる 10 数種類のトンボたちと夜を通して止むことのないカエルの鳴き声です。

私達が田んぼつくりを通して得た真の願いはこのような貴重な場所を、文化や生ものも含めて丸ごと残し、人々がつながりあう街にしたいということです。

活動メモ

（１９９５年５月から１９９６年１２月）

１９９５年

５月　１日　苗代のネット補強　１４日　草取り、堆肥入れ、耕耘
　　２１日　苗代のネット外し　２８日　くろつけ
６月　３日　苗代草取り、追肥　１０日　追肥
　　１７日　苗取り、代かき、ならし　１８日　田植え　２４日　補植
７月　９日　１番草、根切り　２３日　２番草
８月　２０日　虫取り、生物観察会（指導　上村佳孝会員）
　　２６，２７日　柏野夏祭り参加、当会は焼き鳥担当で、たいへん繁盛した。
９月　１０日　かかし作り（４体）、防鳥糸張り　１７日　稲倒伏起こし
　　２４日　稲倒伏起こし　２３，２４日　親子炭焼きキャンプ
　　３０日　稲刈り
１０月　１日　稲刈り　１４日　レンゲ種まき　２１日　脱穀
　　２９日　籾摺り
１１月　２日　精米
　　３日　収穫祭（餅つき、焼き芋、豚汁、バーベキューなど、６０数人参加）
１２月　落ち葉拾い

１９９６年

２月　４日　堆肥切り返し（１回目）
３月　３日　荒起こし、堆肥切り返し（２回目）
４月　７日　荒起こし、堆肥切り返し（３回目）　２１日　苗床作り
　　２７日　種蒔き
５月　５日　耕耘　１２日　堆肥入れ、耕耘　２６日　くろつけ
６月　１，２，３日　水見回りするが、水なし
　　１５日　絵堂地区は田植え終了、佐須地区は田植えの見通し立たず。
　　６月の降雨量が史上ワースト２となる。
７月　１日　近隣の農家に水の融通を頼むが、実現せず。
　　８日　待望の雨　９日　代かき
　　１１日　田植え（もっとも遅い記録となった）
８月　４日　１番草、追肥　１７日　虫取り、消毒　２５日　追肥
　　２３，２４日　柏野夏祭り参加（焼き鳥）
９月　２１日　追肥、かかし作り（４体）
１０月　１９，２０日　稲刈り（田植えの遅れや害虫などのため最悪の出来）
１１月　９日　強風で倒れたはざの修復　１０日　脱穀
　　１７日　籾摺り（例年の２割）
１２月　２１日　納会　２２日　カニ山で堆肥のための落ち葉拾い

活動メモ

（１９９７年１月から１９９８年４月）

１９９７年

１月　１２日　荒起こし（１回目）、堆肥切り返し（１回目）
２月　２日　堆肥切り返し（２回目）
４月　２０日　苗代作り、荒起こし（２回目）　２６日　種蒔き
５月　１８日　堆肥入れ、耕耘、草取り、苗代ネット外し
　　２５日　草取り
６月　８日　くろつけ　２０日　代かき
　　２１，２２日　苗取り、田植え、補植
７月　１日　補植（２回目）　１７日　１番草　２０日　中干し
　　２８日　消毒
８月　１７日　８割方穂がでる　２２日　穂の重みが増す。
　　２２，２３日　柏野夏祭り参加（焼き鳥）
９月　２０日　防鳥テープ張り　２３日　かかし作り（３体）
１０月　４，５日　稲刈り（人手がいっぱいで、穂の重みも十分、収穫の手応えに皆うれしそう。）
　　６、８日　強風ではざが倒れ修復
　　２５，２６日　脱穀
１１月　１，２，３日　親子炭焼きキャンプ（６回目。雑木林との共生を願って続けています。ドラム缶釜で最高の炭がとれました。）
　　１６日　籾摺り
　　２３日　精米（収穫１３６Ｋｇ今までで最高の出来！）
　　２４日　収穫祭
１２月　７日　カニ山で堆肥のための落ち葉拾い（リヤカー３台分）

１９９８年

２月　１５日　荒起こし、堆肥切り返し（１回目）
３月　２２日　荒起こし（２回目）、堆肥切り返し（２回目）
４月　２６日　用水路の清掃と生き物調査、観察会（講師の上村君は我が会の会員で、現在動物生態学を学ぶ都立大４年のトンボ青年です。）
　　２９日　種蒔き

編集後記

１９９５年５月の１１号を出して以来、長らくお休みをしておりましたが、３年ぶりに発行にこぎつけました。継続して発行するためにはそれに携わる人たちのエネルギーが必要だと改めて実感しました。

環境や、教育に対する問題意識が高まる中、我々の実践的活動の役割を再認識し、積極的に発信していきます。（四方田）